

研究種目：若手研究（B）

研究期間： 2007～2009

課題番号：19730391

研究課題名（和文） 青年・成人期の愛着スタイルが恋愛関係ならびに熟年期の夫婦関係の質に及ぼす影響

研究課題名（英文） The effects of early adult attachment styles on quality of romantic relationships in adolescence and married couples in middle age

研究代表者

金政 祐司（KANEMASA YUJI）

大阪人間科学大学・人間科学部・准教授

研究者番号：70388594

研究成果の概要（和文）：

本申請研究は、愛着関係として捉えられる青年期の恋愛関係と中年期(熟年期)の夫婦関係の共通項について、青年・成人期の愛着スタイル、関係における感情経験および関係への評価という観点から検討することを目的として行われた。調査対象者は、103組の恋愛関係にあるカップルならびに156組の中年期の夫婦であった。その結果、双方の関係において、愛着次元の“関係不安”は、回答者本人と相手のネガティブ感情と正の相関関係を示し、同様に、両者の関係への評価と負の相関関係を示していた。しかし、“親密性回避”の次元は、双方の関係において、回答者本人のネガティブ感情と関連を示したのみであった。さらに、上記の“関係不安”と本人ならびに相手の関係への評価との関連は、双方の関係において、各々のネガティブ感情経験によって媒介されていた。それらの結果は、青年期の恋愛関係ならびに中年期の夫婦関係、双方における青年・成人期の愛着スタイルの自己成就予言傾向を示すものであると言える。

研究成果の概要（英文）：

This study was conducted to reveal the commonality between romantic couples in early adults and middle-age married couples, based on the relationships between early adult attachment dimensions, emotional experiences in the relationships, and evaluation toward the relationships. Participants were 103 romantic couples in early adults and 156 pairs of middle-age couples. The main results were as follows: in those three relationships, attachment anxiety was positively correlated to one's own and partner's negative emotion in the relationships and negatively related to one's own and partner's evaluation toward relationships. But with regard to attachment avoidance, the commonality was that attachment avoidance was only related to one's own negative emotion. In addition, the relations between attachment anxiety and one's own and partner's evaluation toward relationships were mediated by one's own and partner's negative emotion respectively in those three relationships. The results revealed the self-fulfilling prophecy of attachment styles in both romantic couples in early adults and middle-age couples.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	900,000	270,000	1170,000
2009年度	800,000	240,000	1040,000
年度			
年度			
総計	2400,000	510,000	2910,000

研究分野：社会科学B

科研費の分科・細目：心理学 社会心理学

キーワード：青年・成人期の愛着スタイル，関係の特徴，ペアデータ，恋愛関係，夫婦関係

1. 研究開始当初の背景

個人が他者と親密な関係を築き、それを維持していくことは心身とも健康を考える上において重要なことである。また、本研究の対象とする恋愛関係ならびに中年期の夫婦関係の質の維持、向上を考えることは、現代日本の抱える大きな問題の一つである。少子化の問題とも親和性が深い。本研究では、このような恋愛関係ならびに中年期の夫婦関係の特徴や質について、発達的な観点をもつ青年・成人期の愛着理論(Hazan & Shaver, 1987)からのアプローチを試みる。青年・成人期の愛着スタイルとは、個人の発達過程を通じて培われた自己や他者への信念や期待として捉えられ、この愛着スタイルが恋愛関係や配偶者関係にどのような影響を与えるのかについて、ペア調査を用いて検討を行うことで、恋愛や夫婦関係を形成する両者にとってより良い関係を維持していくため方向性の提言が可能となると考えられる。

2. 研究の目的

本申請研究では、親密な対人関係の中でも、主に青年・成人期において愛着関係であるとみなされる中年期での配偶者関係(夫婦関係)ならびに青年期における恋愛関係(Shaver & Hazan, 1988)に焦点を当てながらペア調査を行い、それによって夫婦およびカップルにおける両者の愛着スタイルが関係の質に及ぼす影響ならびにその影響に関する双方の関係間の差異について横断的な観点を交えながら検討を行っていく。また、その際、青年・成人期の愛着スタイル、関係における感情経験および関係への評価という観点から検討することを目的として行われた。

3. 研究の方法

青年期の恋愛関係のペア調査は、大学で講義を受講している学生を対象に依頼を行った。その際、本調査への協力が任意のものであることや調査協力者の匿名性は保たれること、また、本調査が青年期の恋愛関係を対象にしており、現在恋愛関係にあるカップルの両者の協力を求めるものあることを教示した。質問紙の回収は郵送にて行った。その結果、108組の互いに対応するカップルと男性4名、女性10名の単独の有効回答を得た。単独の回答者14名ならびにカップル間で互いの年齢や交際期間についてある程度の対応が見られないカップルについては分析から除外した。その結果、103組の206名のカップルを分析の対象とした。なお、男性の平均年齢は20.87歳(SD=2.41)、女性の平均年齢は19.71歳(SD=1.44)、また、交際期間の平均は14.24ヶ月(SD=14.57)であった。

その結果、互いに対応する180組の中年期夫婦の有効回答ならびに女性(妻)2名の単独の有効回答を得た。2名の単独の回答者ならびに回収時に封筒が密封されていなかったもの、明らかに質問内容を理解して回答していないものや本研究の対象者(青年期の子どもを持つ中年期の夫婦)からずれていると判断されるもの、さらに、夫婦間で互いの年齢や結婚年数に齟齬があるものについては分析から除外した。その結果、156組の312名の夫婦を分析の対象とした。なお、夫の平均年齢は52.01歳(SD=5.15)、妻の平均年齢は49.03歳(SD=4.67)、また、結婚年数の平均は23.95年(SD=4.31)、子どもの数の平均は2.28人(SD=0.62)であった。

調査の内容については、恋愛関係および夫婦関係で共通の調査項目を用いた。それらは、1. 一般他者版 ECR (中尾・加藤, 2004)–回答者の愛着次元を測定する尺度(20項目, 7件

法), 2. 感情経験尺度(立脇, 2007)—回答者が自分たちの関係において経験する感情の程度を測定するための尺度(20項目, 5件法), 3. 関係への評価尺度(金政・大坊, 2003)—回答者の自ら関係に対する評価を尋ねるための尺度(4項目, 7件法)である。

なお, 恋愛および夫婦関係のデモグラフィックな特徴を問う項目群は, 恋愛関係については, 回答者と恋愛相手の年齢, 現在の交際相手の職業, 交際期間, 夫婦関係については, 自分と配偶者の年齢, 結婚年数, 子どもの数, 自分の職業の記入を求めた。

4. 研究成果

青年期の恋愛関係についての研究成果

恋愛関係において, 回答者の愛着次元と本人の感情経験ならびにその関係への評価との関連について検討するため, それらの変数間に回答者の性別を統制した偏相関分析を行った。その結果(Table 1), 恋愛関係においても青年期の子どもと母親との関係の時と同様, 関係不安は関係内のネガティブ感情経験と有意な正の相関($r = .37, p < .001$)を, 関係への評価とは有意な負の相関($r = -.21, p < .01$)を示していた。また, 親密性回避も, ネガティブ感情経験と有意な正の相関($r = .24, p < .01$)を, ポジティブ感情経験と有意な負の相関($r = -.30, p < .001$)を示していた。ただし, 親密性回避は, 研究1では見られなかった傾向として, 本人の関係への評価と負の相関($r = -.16, p < .05$)を示していた。

次に, 回答者の愛着次元と恋愛相手が回答した関係内の感情経験ならびに関係への評価との関連について検討を行うため, 先ほどと同じように回答者の性別を統制した偏相関分析を行った。その結果(Table 1), 関係不安は, 恋愛関係でも相手のネガティブ感情経験とは有意な正の相関関係($r = .18, p < .01$)を, また, 恋愛相手による関係への評価とは有意な負の相関関係($r = -.17,$

Table 1 恋愛関係における愛着次元と本人および相手の関係内の感情経験, 関係への評価との偏相関関係

	本人の愛着次元			
		関係不安	親密性回避	
	M(SD)	3.58(1.32)	3.43(1.02)	
本人の回答	ネガティブ感情	1.99(0.69)	.37 ***	.24 **
	ポジティブ感情	4.00(0.62)	-.04	-.30 ***
	関係への評価	5.83(1.13)	-.21 **	-.16 *
相手の回答	ネガティブ感情		.18 **	.01
	ポジティブ感情		-.10	.04
	関係への評価		-.17 *	.05

Note. N=206. "性別"をダミー変数として統制した。

*** $p < .001$; ** $p < .01$; * $p < .05$

$p < .05$)を示していた。

次に, 恋愛関係における媒介モデルの検討を行うため, 1. 本人の回答した愛着スタイル, 2. 本人(および恋愛相手)の関係内の感情経験, 3. 本人(および恋愛相手)の関係への評価というモデルを設定し, パス解析を行なった。その結果, 愛着次元の関係不安は, 本人のネガティブ感情を媒介して本人の関係への評価に影響していることが示された(Figure 1)。また, 相手の関係への評価についても同様に関係不安が相手のネガティブ感情を媒介して影響を及ぼしているという結果が得られた(Figure 2)。

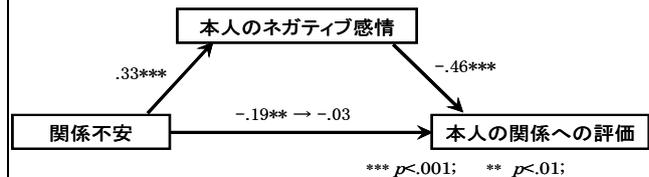


Figure 1 恋愛関係において関係不安が本人のネガティブ感情を媒介し関係評価へ影響するモデル

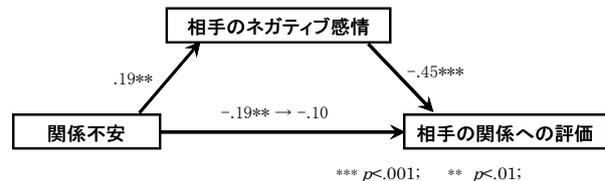


Figure 2 恋愛関係において関係不安が相手のネガティブ感情を媒介し関係評価へ影響するモデル

本研究の結果から, 青年期の恋愛関係において, 愛着次元の“関係不安”は, 回答者本人と恋愛相手の関係内のネガティブ感情を喚起させ, また, 両者の関係への評価を低下させることが示唆された。“親密性回避”の次元は, 回答者本人の関係内のネガティブ感情およびポジティブ感情を喚起させるのみであった。さらに, 上記の“関係不安”と本人ならびに相手の関係への評価との関連は, 両者のネガティブ感情経験によって媒介されていた。この媒介モデルの結果から, 恋愛関係において相手から見捨てられることを不安に感じるほど, その不安や固執自体が本人や相手のネガティブ感情を招き, 双方の関係への評価を低下させ, 関係の良好性や継続性を危険にさらすことに繋がってしまうという一連のプロセスが示された。これは元々予期された関係崩壊への懸念や相手から拒絶されることへの不安が具現化したものとして捉えることができ, 本研究の結果は, Feeney, Noller, & Roberts (2000)が言及する愛着における予言の自己成就的傾向について, それら二者関係のペアデータを用いた新たな証左を提出するものであると言える。

中年夫婦間家についての研究成果

夫婦関係において、回答者の愛着二次元と本人の関係内での感情経験ならびに関係への評価との間の関連について検討を行うため、それらに性別を統制した偏相関分析を行った。その結果(Table 2)、関係不安ならびに親密性回避は、それぞれ関係内のネガティブ感情経験と有意な正の関連($r=.29, p<.001$; $r=.18, p<.01$)を、関係への評価とは有意な負の関連($r=-.13, p<.01$; $r=-.15, p<.01$)を示した。

次に、回答者の愛着二次元と配偶者の感情経験ならびに関係への評価との間に性別を統制した偏相関分析を行った。その結果(Table 2)、関係不安は、配偶者のネガティブ感情経験とは有意な正の相関関係($r=.19, p<.001$)を、関係への評価とは有意な負の相関関係($r=-.12, p<.05$)を示した。

Table 2 中年期の夫婦関係における愛着次元と本人並びに配偶者の関係内の感情経験、関係への評価との偏相関関係

		本人の愛着次元			
		関係不安		親密性回避	
		α 係数	.89	.84	
α	$M(SD)$		3.03(0.96)	3.87(0.88)	
本人の回答	ネガティブ感情	.88	2.14(0.64)	.29 ***	.18 **
	ポジティブ感情	.92	3.40(0.76)	-.03	-.10
	関係への評価	.95	5.10(1.37)	-.13 **	-.15 **
配偶者の回答	ネガティブ感情			.19 ***	.01
	ポジティブ感情			-.08	.05
	関係への評価			-.12 *	.03

Note. $N=308$. "性別"をダミー変数として統制した。

*** $p<.001$; ** $p<.01$; * $p<.05$

次に、夫婦関係における媒介モデルの検討を行うため、愛着二次元、関係内の感情経験、関係への評価に関してパス解析を行った。その結果、関係不安から本人の関係への評価への影響は、本人の関係内のネガティブ感情を媒介させることで、 $\beta=-.11, p<.05$ から $\beta=-.05, ns$ に低下した(Figure 3)。さらに、として、親密性回避から本人の関係への評価への影響が、本人の関係内のネガティブ感情を媒介させることで、 $\beta=-.13, p<.05$ から $\beta=-.05, ns$ に低下していた(Figure 4)。これは、先の青年期の恋愛関係では見られなかった結果である。また、回答者の関係不安から配偶者の関係への評価への影響は、配偶者の関係内のネガティブ感情を媒介させることで、 $\beta=-.13, p<.05$ から $\beta=-.01, ns$ に低下していた(Figure 5)。

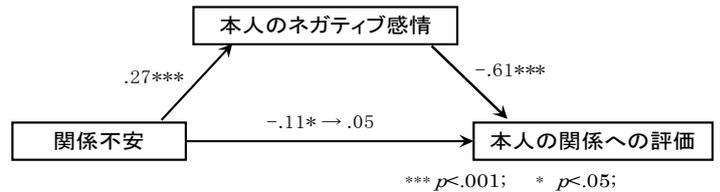


Figure 3 夫婦関係において関係不安が本人のネガティブ感情を媒介し関係評価へ影響するモデル

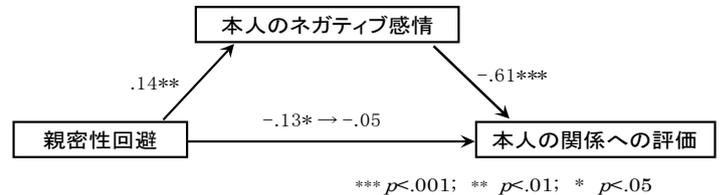


Figure 4 夫婦関係において親密性回避が本人のネガティブ感情を媒介して関係評価に影響を及ぼすモデル

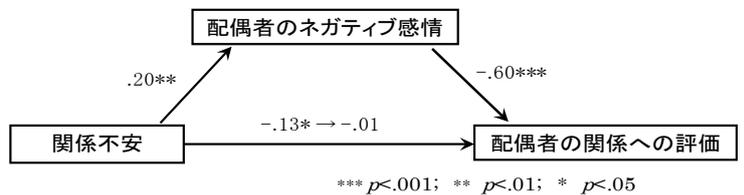


Figure 5 夫婦関係において関係不安が配偶者のネガティブ感情を媒介して関係評価に影響を及ぼすモデル

この中年期の夫婦関係の調査結果は、先の青年期の青年期の恋愛関係での調査結果との共通項を示しているといえる。つまり、双方の関係において、愛着次元の“関係不安”は、回答者本人と相手のネガティブ感情と正の相関関係を示し、同様に、両者の関係への評価と負の相関関係を示していた。また、“親密性回避”の次元は、双方の関係において、回答者本人のネガティブ感情と関連を示すのみであった。さらに、“関係不安”と本人ならびに相手の関係への評価との関連は、双方の関係において、各々のネガティブ感情経験によって媒介されていた。

これらの結果から、恋愛ならびに中年期の夫婦関係において関係への不安や相手から見捨てられることを不安に感じるほど、双方の関係でネガティブ感情を喚起させることに繋がり、その結果、双方の関係への評価を低下させてしまうというプロセスが示されたと言える。これは、本人の見捨てられ不安や関係崩壊への懸念が、そのような不安や懸念を抱くがゆえに、結果的に、親密な二者関係の双方の関係への評価を低下させ、関係を危機にさらす可能性を高めるという関係不安における予言の自己成就傾向(金政, 2009; Simpson & Rholes, 2004)が、青年期の恋愛関係ならびに中年期の夫婦関係においても認められることを示唆するものであるといえる。今後は、このような関係への不安がカ

ップルや夫婦関係の両者のネガティブ感情経験を媒介して関係への評価を低下させるというプロセスをいかに断ち切るかについての研究が求められるところとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 金政祐司 (印刷中). 中年期の夫婦関係において成人の愛着スタイルが関係内での感情経験ならびに関係への評価に及ぼす影響 パーソナリティ研究.
- ② 金政祐司 (2009). 青年期の母-子ども関係と恋愛関係の共通性の検討: 青年期の2つの愛着関係における悲しき予言の自己成就 社会心理学研究, 25, 11-20.

[学会発表] (計 6 件)

- ① Kanemasa, Y. (2010). The commonality among mother-child dyads in early adults, romantic couples in early adults, and middle-age couples in Japan. The 11th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 116-117.
- ② Kanemasa, Y. (2009). The commonality between mother-child and romantic dyads in early adults: tragic self-fulfilling in two attachment relationships in early adults. 6th Biennial conference international academy for intercultural research, 44.
- ③ 金政祐司 (2009). 中年期の夫婦関係において成人の愛着スタイルが関係内での感情経験ならびに関係への評価に及ぼす影響 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会発表論文集, 114-115.
- ④ Kanemasa, Y. (2008). Adult attachment dimensions, emotion, and evaluation toward relationships; similarity between mother-child dyads and romantic relationships in adolescents. 29th International Congress of Psychology. Berlin, 234.
- ⑤ 金政祐司 (2008). 期待はずれがうみ落とせしもの—青年期の恋愛関係における期待はずれが関係内の感情経験と適応性に及ぼす影響— 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 112-113
- ⑥ 金政祐司 (2008). 自己および他者への信念や期待が愛着関係での感情経験と関係への評価に及ぼす影響—青年期の 2

つの愛着関係で悲しき予言は成就してしまうのか?— 日本グループ・ダイナミックス学会第 55 回大会発表論文集, 14-17.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金政祐司 (KANEMASA YUJI)

大阪人間科学大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 70388594